

10月



川系男子の『川と人』めぐり No. 28～大岡川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪夕焼け小焼けの 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か
(唱歌『赤とんぼ』 作詞：三木露風作曲：山田耕筰)



図1 大岡川流域 (神奈川県 大岡川水系河川整備基本方針 流域図をもとに加筆作成)

表1 行程

番号	立ち寄り地点	みどころ	時刻
0	港南台駅	集合	10:00集合
1	円海山	源流域	10:40-12:00
2	大岡川分水路大岡川分派点	暗渠放水路中間地点	12:55-13:12
3	大岡川分水路河口付近(屏風ヶ浦橋)	暗渠放水路終着地点	13:19-13:30
4	大岡川分水路日野川分派点	暗渠放水路起点	13:40-14:15
5	大岡川・日野川合流点	親水空間	14:20-15:10
6	弘明寺付近(潮止付近)	親水空間、潮止、屋根付き橋と商店街	15:20-15:40
7	大岡川・中村川分派点(蒔田公園)	分派点	15:45-16:05
8	掘割川・中村川分派点	分派点、山を切り抜いて放水路	16:10-16:20
9	桜橋付近	水辺再開発事業	16:25-16:40
10	花鳥風月研究室(桜木町駅付近)	よこはまかわを考える会の拠点	17:00-18:15

1. 謎めいた都市河川

2014年9月27日、大岡川を巡った。前日(26日)によこはまかわを考える会の第357回の定例研究会で講演をする機会があり、会の方々に大岡川をご案内いただいた。研究室を卒業し、横浜に住んでいる後輩も駆けつけ、7名で巡った。

大岡川は円海山に源を発し、横浜市の磯子区、南区を貫流し、桜木町付近で東京湾に注ぐ河川である。(図1) 流路延長14km、流域面積27.25km²で、流域



図2 源流域の大岡川の様子



図4 大岡川分水路（河口付近 終点）



図3 大岡川分水路（中間地点）



図5 大岡川分水路（起点）

の土地利用のほとんどは宅地であり、横浜の市街地を流れるいわゆる都市河川である。都市河川である大岡川周辺は人口密集地で治水重要性も高く、人の生命と財産が集中している。土地に余裕がないため、雨をどう流すかが治水上重要になってくる。そんな川を管理する上で一番重要なのは洪水対策でいかにして洪水を安全に流下させるかであり、水系には様々な治水上の工夫がされている。都市河川ならではの謎めいた川の構造に着目しながら川巡りを行った。

2. 源流域

最初に大岡川の源流の氷取沢市民の森を歩いた。高台からは桜木町のランドマークタワーが見え、大岡川の河口がそこに達していることが分かる。山の中の細道を歩く。起伏がピークに達した地点から下り始めると、徐々に水が染み出した沢が表れ始め、あるところから大きな水たまりとなり、幼い大岡川が姿をみせる。川底にはアブラハヤと思われる魚影も見える。水面にはギンヤンマやアカトンボが飛び交う。ある地点まで来ると川の流れは高速道路の高架の下に差し掛かる。パイプや暗渠を通して川に合流してくる水に若干、鉄分を含んだ赤水が発生している（図2）。おそらく、高速建設時に鉄分の多い水

脈を掘り当てたか、高速の構造物の金属部分から伝ってくるものなのか2通り考えられる。また、高速道路の建設の関係で、排水を処理するための調節池が設けられており、暗渠なども合わせると源流域とはいえ、都市の川は複雑な様相をみせている。

3. 大岡川分水路

次に大岡川分水路を日野川分派点（起点）と大岡川分派点（中間点）と屏風ヶ浦橋の河口付近のところから見学した（図3～図5）。

大岡川は昭和36年に梅雨前線に伴う豪雨と昭和41年の台風に伴う豪雨による氾濫を経験しており、住宅街に大きな被害をもたらした。そこで洪水調節の目玉として、新たに放水路を掘って大岡川分水路の計画に着手した。大岡川分水路は大岡川支流の日野川を起点に分派し、大岡川の地下を通り、海へと流れる。大雨の際には大岡川本川の下流側の水門を閉め、全水量を放水路に流すことができ、下流への負荷を抑えている。最大で200m³/sの洪水調節能力をもつ。住宅街の川の中に大きな円形をした暗渠管があり、巨大な地下宮殿への入り口のようにもみえる。分派点の近くを散歩している住民の人もいたが、果たして何人の人がこの構造物の機能を真に理解し



図6 大岡川とビル群



図8 中村川と堀割川分派点



図7 大岡川と中村川分派点

ているだろうか。特に分水路の中間地点の大岡川と交わる場所は複雑な構造をしていて、見る者を圧倒させてくれる。大雨が降った際にどのようにこの構造物が機能を発揮しているのか川系男子としては気になるところである。

4. 日野川合流点

次に大岡川と日野川の合流点を歩いた。近くには神社がある。大岡川は掘り込み河道となっており、道路と河床の高低差が3m以上ある。合流点より上流の箇所は高低差により、水辺へのアクセスが困難な区間が多かったがこの周辺は川への降り口があり、さらに川沿いに遊歩道も整備されている。磯さん曰く、ここはよこはまかわを考える会が最初の時期に一生懸命川掃除をした箇所で、当時はゴミをはじめとし、自転車すらも落ちていたという。その現状を憂いた会の創始者でもあり、横浜市役所の職員でもあった故森清和さんとともにこの場所をきれいにしていたという。市民が川へ関心を向けはじめると、もっといい水辺を望む声が高まり、神奈川県親水空間の整備もはじまり、現在のような水辺空間が出来上がった(図6)。今ではハグロトンボがそこら中に飛んでいる。当初から会のメンバーとして、

また横浜市の職員として奔走していた磯さんにとっても相当な思い入れのある水辺のようだ。

川の中から空を見上げると高い建物。早期に都市空間の中に包括的に水辺空間をつくりだした横浜の水辺は都市河川の水辺再生の先駆者的存在といえる。

5. 数々の分派川

下流にいくと大岡川と中村川の分派点がある(図7)。分派点付近は両河川の分派の方向には高速道路が伸びていて、川はその下を通っている。日本橋川に代表されるように、首都圏における高速道路建設は用地買収をできるだけ少なくするために公共用地である川の上に沿って建設が進んだ時代がある。これにより川は常に日陰になり、高速道路高架などの構造物の連続でどこか無機質な空間へと変化してしまった。大岡川のこの場所にも同じことがいえる。

この大岡川と中村川の分派点だが、この両河川に挟まれる釣り鐘状の土地は江戸時代は入江だった場所で、埋め立て地である。大岡川の河口はこの分派点であったが、埋め立てが進むにつれて西側と東側に流路を延長し、現在のような分派川をつくりあげた。また、分派後の中村川のほうからはさらなる分派川である堀割川があり、明治時代に山を切り抜いて流路を建設している(図8)。大岡川分水路も含めると1水系に4つの河口があることになる。多分派の都市河川という性質では広島市内の太田川水系にも構造がよく似ている。大岡川の4つの河口(分派川)にそれぞれの改修史があり、非常に興味深い。

6. 川と道の交差点(弘明寺商店街付近)

分派点からさらに大岡川を下る。河口から3kmの弘明寺付近は大岡川の潮止付近であり、汽水域はこれより下流となる。付近には汽水域に多く生息するボラが水面を跳ねる姿もよくみられた。弘明寺付近には弘明寺商店街が大岡川と交差しており、アーケードは橋の上にもかかっている。(図9)また、橋は2線に区切られていて人や車の渡河用の道とちょっと腰を休めるベンチスペースがある。ベンチスパー



図9 大岡川と弘明寺商店街



図10 大岡川と桜並木

スには川の方向を向いて多くの人が座っておしゃべりをする憩いの場になっている。こんなおもしろい空間は今まで見たことがない。よこはまかわを考える会や横浜市内の小学校の先生たちによって30年以上続いている『横浜の水辺と緑を考える子ども会議』が大岡小学校を中心に開催する時は校舎を飛び出し、この商店街の屋根付き橋の上で車座になり、通行人にみてもらいながら模造紙を描いたりするそうだ。川と道の交差点に夢を描く子供たちのいるこの空間は素晴らしい空間である。

7. 大岡川と桜並木

弘明寺、黄金町、日ノ出町にかけて大岡川沿いには桜並木が連続している。4月には桜まつりがおこなわれ、川沿いは多くの人でにぎわう。川の中ではカヌー高いが行われ、河口の桜木町から川をさかのぼり、川の中から桜を楽しむこともできる。最近ではサップと呼ばれる立ちこぎカヌーが流行っていて、川の中で遊んでいるのを見ることもできる(図10)。大岡川沿いでこのような乗り物で遊ぶためには、事前に神奈川県に舟の係留許可を申請することで係留場に下りる鍵が借りることができ、いつでも利用することができる。人が楽しめる利活用の工夫がこの

川沿いには数多くある。最近では神奈川県による大岡川沿いに水辺再開発が進められている区間もあり、包括占用などの制度を利用しさらなる利活用の推進に努めようとする動きもあるようで、大岡川の水辺利用は常に時代の先を行っている。

8. 花鳥風月のまちづくり

今回大岡川をみることで横浜市内の都市河川について理解を深めることができた。大都会横浜であっても都市に憩いの空間やハグロトンボの住む空間をつくりだせたのは横浜の川づくりの根底に『花鳥風月のまちづくり』という考え方があったからである。

当時の横浜市は行政機構内に『花鳥風月研究室』というものを設置した。横浜市エコシティ環境報告書の副題を花鳥風月のまちづくりと名付け、森清和さんをはじめとする当時の職員の人たちはいかにして大都会に生き物が住める空間を作り出し、子供たちが外を駆け回るような空間を作り出すか奔走し、その成果が今の横浜の川づくりに現れている。都市でもいい川をつくるのは可能だというメッセージは全国の都市河川に希望と自信を与えただろう。機構改組により花鳥風月研究室はなくなったが、桜木町にあるよこはまかわを考える会の事務所には『花鳥風月研究室』と記されていて、花鳥風月のまちづくりの考え方は今でもきちんと引き継がれている。花鳥風月のまちづくりに奔走した横浜のすべての人々に敬意を表したい。

最後に森清和さんの最期の手紙を紹介して大岡川めぐりの占めにしたい。

水辺の風景と心の再生

日本は花鳥風月の保護・保全・修復技術の先進国。余命幾ばくもない今、思い残すのは、それを生かした豊かな日本の復権。私の水辺候補を挙げると、釧路湿原、中津川の盛岡、三陸の気仙川、仙台の広瀬川、見沼田んぼ、白魚の隅田川と玉のごとき多摩川、静岡大田川の田園風景、磐田の桶ヶ谷沼、三重の宮川、近江八幡、琵琶湖の芦原、新潟の通船川、千曲川スケッチ、愛知の矢作川、郡上八幡、京の川、コウノリの円山川、旭川と百間川、錦帯橋と錦川、徳島の海部川、川尻、水前寺、五ヶ瀬川、柳川、石橋の甲突川や中島川。

そして私の都市河川の原点の大岡川、花が吹雪き、螢が飛び交い、彼岸花が染める里の川、水辺林に覆われた森の川、ダムや放流に頼らない川……。

後はみんなで考えましょう！

【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りにはテレビに映る川がどこの川か当てること。